

# ゆわらな住の講座



「席がかわせて頂ます。」

昔から家は「まのうちに三度建てな  
り」と満足いくものはございなくてえ  
ことを申します。むかし、本島に三度  
建てることのできる人なんてえのはど  
ういふもんじやござりませぬ。まして  
やこのご時世でござります。一軒の家  
でさえ、土地な切、金な切、建てられ  
ない、てな仕限みになつております。  
それでも頑強つて家を建てようつて人  
は備ゆもんですなあ。そんな備ゆ人で  
もゆき建てる屋になるどゆるゆる大変  
なことが多ゆようですな。そのてんや  
わんやが結構おもゆるゆもので……

「あゝつ先生ごんにちわい」

「おくハつあんじやないが、朝分權  
様がよさぞうじやねえか、何かゆゆ之  
とでもあつたのかゆ」

「あつたんじやないんで、へえこれ  
からあるんで」

「ほう何なんだゆ」

「実は、あつじ家を建てようと思つ  
たゆ」

「ほう」

「何だか知らねえけどゆなあ、長屋の  
陣中がどんどん家を建てて出てゆつちま



うもんでねえ、あつじも傾けちやいの  
れねえと……」

「誰か傾けじやないだるう？」

「誰か傾けじやないってゆったって、  
あつじだけ貧乏人みたゆじやないっす  
か」

「誰のがかい」

「せうゆわれりやせうかも知れな  
ないっすけど、あつじだって、おつか  
あやがきにゆい思ひのゆとつもさせ  
やうてえと……」

「わかった、わかった、急に破く奴  
があるか、まあ、おまえの気持ちわ  
かった、長服も寂しくなるが、それも  
仕方のないことだるう、とさるう、計  
画はどごまで進んでゆるんだい」

「計画ってえと」

「計画ってえとだって、おまえね、  
家を建てるんだるう、ゆるゆる考えな  
けりやゆいけなゆいことがあるだるうが」

「ぜんなもんすつかねえ」

「なんてのんきな奴なんだ、どんな  
家になるか心配で仕方ない、ゆいゆい  
これかめ私が家づくゆいの計画のことを  
聞くかゆい〜考えて睡えるんだぞ」

「はい、わかりました」

「まずね、だな、あつじに誰かゆいゆい  
考えてゆるんだ」

「どご、たつて、まさか用や火屋つ  
てわけにはゆかないでじやう」

「せうゆいことじやなく、この田  
に住みたゆかつてごごだ」

「あくぜんなもんごごだつてゆいっ  
すよ」

「ぜんなごごはなゆだるう、おまえ  
の仕事のごごや、子供の學校へ、親元  
船どの付き合ひ、と考えたゆ、あごご  
に住みたゆ、ごごに住みたゆゆいゆい  
があるだるう」

「せうゆいごごなめすすまきの近く  
に」

「はかをゆいゆいゆいゆい、まあゆ  
いたるう、じやあつじだ、貧乏はどゆす  
る」

「あつじはどゆも善手で……」

「何が」

「ゆい、ゆいゆいゆい、あつじはゆい  
ゆいゆいゆいゆいゆい」

「何をゆいゆいゆい、私は貧乏の  
ごごをゆいゆいゆい」

「ゆいゆいゆい、ゆいゆいゆい」

「それは手キンだ、ちよつと横文字  
を覚えてごごにゆいゆいゆい、まつた  
ゆ、貧乏、つまゆいゆい、貧乏はゆいゆい  
ゆい」

「貧乏は天下の強ゆいもの〜」





「何を既取つてゐるんだい。金は天下の廻りもの。誰かにどうゆいな。むかし、八つあんのところはまげて通る」

「おの通り」

「袖挿してどうする。手舞を立てなつていつてゐるんだ」

「それはもう、ちゃんど」

「ほろ、どのくぬいだ」

「ゆやね、あつても実は頭へたんですよ。國のどこでこの前建てたてじよ。てお聞ひたんですよ、一雨二分たつて、これくぬいなあなんだか……」

「ああ、どうだ、國んどこで建てたな」

「へい」

「あれは世では大山屋どゆうんだよ」

「……どうですか、道理でね、おかむいと思つたんですよ。夜間もなゆいはばかりもなゆい、あく大山屋……ほちのね……」

「まあ、そんなにがつかりするんじやない、手舞はむつくり立てればゆいのま揃さはどうなんだ」

「榎木屋つてえ商いもなかなか大皮でねえ、去年はまかつたんですよ、てねあつちごつちのお腰飯の度で枝を切つた切つた、忙しかつたなあ」

「ほろ」

「てね、去年切り過ぎたんでね、今年はてんで仕事がない、なんかなくなりませんか、先生のくびを切るのか……」

「榎やかむやないね。まあ、大皮だ、が商売だ、良いあとは悪い、悪いあとは良い、能きずにやるのが商いと昔かぬいうだろう。まあ、大商でもいなぬい、金はなんどかなりどうだ。さ、土地と金どければ決は建物だ。ゆくのおまえさんでも、どんな家に住みたゆかくぬいは考えてゐるだろう」

「そりやもう当然」

「ほろ、聞かせてもぬいたゆいものだな」

「お聞かせするほどのもんではなぬいが、簡単に話すとね」

「簡単に話すと」

「金太どど同心家」

「……それだけか」

「それだけつてたつて、それだけですよ」

「金太どまるつきり同心家でゆいつてごどか」

「ゆや、金太の家が住みやすゆいんてね、その通り建てようと思つてゐるんですよ」

「おまえね、ゆくの金太の家が住み





やすゆいゆったって、そとで實際にす  
つと難めしたわけはなひだるう。ま  
ったく同じものゆいゆのも考えもの  
はなひかな」

「あくそゆか、そとですまね。おひ  
の金太の家にはゆるったって、一日中ゆ  
るわけじやなひんだ。朝めし食って、  
昼もごちそうになつて、三時の一膳に  
おじやまして、夕めし一膳に食って、  
寝るとき金太のかみさんと一膳だつた  
だけだもんな」

「おひおひ、どんでもなり野郎だね」  
「ゆや、誰うんすよ、寝る間際まで  
金太とごちそうを飲んでたんで、寝る時  
間が金太のごとご一膳だつたつてごど  
ですま」

「まぢあむむひぢひぢをするんぢや  
なひよ、ごもかく、話を聞いてたぬ、  
おまえ家にゆる時間がほどどなひぢ  
やなひか」

「たまにはひますま」  
「たまにはじやなひ、ゆいゆの家ど  
ゆいゆのは生活の基礎なんだ、自分の家  
族の生活を考えたぬ、人と同じ家つて  
ごとはなひだるう。人それぞれ生活が  
違ひ、だから家も違ひ、当然のごとだ  
るう、金太と同じてゆいゆなんて決めち  
まうと、あどごなんでもむつてゆいゆか

なひもんだぞ」

「はあくさすが先生、ためになりま  
す、けどね、そんなにゆるゆるあつた  
ぬ、難しくて家建てるのやめようかな  
つて氣になつちまひますま」

「はかだね、それを難ひゆごたど、  
考えるかゆいゆになるんだ、命の難め  
ひど、これからの難めひを考えるんだ、  
楽ひゆごじやなひか」

「ぜんなもんすかね」  
「どうも、おまえは根本的に考え直  
さなければ駄目だゆいゆだね……ごどる  
で八つあんや、設計やぬ、工事もゆい  
どうするんだゆ」

「それなんすけど、おひおね、大工  
の熊に頼もうと思つて行つてみたんで  
すま、するつてえと、熊の野郎へおひ  
おは、まるじやなひか駄目だゆいゆ  
きうんでさあ」

「なんだゆ、そのまるじやなひゆつて  
のは」  
「おひおむわかんなひです、あれ、  
まるじやなひか、さんがくつてきつて  
たつつけか」

「ますますわかななひね」  
「ゆや、なんでもね、試験を張けな  
きやもゆいゆなひゆつてんてす、難ひゆ  
ひゆいゆさ、その三膳つてえのは」





「それをいふなら資格だろ」

「あつ、その、資格、資格、で、なんですか、その資格って」

「一階とか二階とか、建築士の資格のことだよ、これがないと、設計などの仕事ができないんだ」

「それで熊の野郎、駄目だつて言つてたんだ」

「まあ、資格をもつていても、建主の希望をちゃんどつかんで設計してくれる、良心的なところを選んだ方がいいな」

「あ、そんなところには値段が高くなるわ」

「まあ、すべてが安がるの悪がるのとはいひなりの、安いにはそれなりのかあつがあるものだよ、安いからいいなめいひが、悪いからいいもあるかめ無をつけなりのな」

「へ、いひ悪いはどうかやつて見分けるんて」

「まあ、そのためにおまえ自身がもう少し勉強いなりのな」

「おひめ、自慢じやないが昔から勉強は大の苦手なんでさあ、あくあなんかだんだん面倒になつてきちまつたなあ」

「あ、そんなことをいふもんじやないよ、」

みんな同じ悪いをして家を建ててきたんだ、わしも昔はゆるゆる苦勞して…あれ、いなくなつてしまつた、ハつつあん本場に大丈夫なのかねえ、」

さて、同日の朝つのは大変早いものでござりまして、一年ほど時が過ぎました、先生も相変わらぬの難めいごさります。

「あ、つ先生ごんにちわ」

「お、ハつつあんじやないか、随分久しぶりだね、一年ぶりじやあなりのかね、いっただいどうしてたんだね」

「実はあつ家を建てたんで」

「ほ、ついにやつたか」

「あん時先生にゆるゆる教わつたおかげで随分いひ家になりやした、本道にありがどうござりました」

「いやいや、礼を言われるほどのこともないが、とにかく良かった。とこるで商売の方はどうなんだい」

「実はそのことなんですが…種水屋をやめちまつたんで…」

「え、つ、いっただいどういわけなんだい」

自分で家をつくるんで、ゆるゆる勉強して、それがまた楽しくて、気が付いたらおひめ、建築屋になつてました、お娘がふるむいようて、」